

# 孤狼

もだゆん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

修羅ルートやって衝動書きした、マジギレ狼のはなし。

中途半端に書いたまんまだったので供養を兼ねてあげ。

ガバガバてきとー修正なしなので色々大目に見て下さい。

孤  
狼

目  
次

1



# 孤狼

古井戸の底、狼の忍は白昼夢を見た。

己と瓜二つの男が、己の眠るまさにこの場所で目覚め、主を巡り戦い尽くす夢。

主を取り戻し、主の願いを叶えるため、翔び、駆け、斬り結び、薄の原で終わる。そんなお人好しな己の夢。

世は欺瞞と謀に満ちていると、孤独な狼は考える。

汝が為、人の為、世の為などと言いつては、偽りを築き、嘘で固めて真を隠す。

今では己の出自すら定かではないが、我が鈍い頭では、そんな世が兎角に生き辛く、だからこそ戦跡の武器漁りなどして、極力他人と関わらずに生きていたように思える。

あの日義父に拾われ狼の名を戴いた時は、妙に腑に落ちたものだ。

一匹狼ははぐれ者。

群れに馴染めぬ外道者が、ひそりと生きる唯一の道なり。

故に孤独の男は、狼となる前、忍びとなるよりも前、一人で生き始めた餓鬼の時分から信条を定めた。

俺は誰も偽らぬ。この欺きの世で、己ばかりは。

だからこそ、何となしに気に入らぬのだ。

何処までも甘くお人好しな、夢の己が。

見ておれば、謀る者、言の葉翻す者の多いこと多いこと。

それでもなお信じ、遂には主に殉じた己の、何と報われず、そして間抜けなことよ。

掟に縛られぬ己の可能性。それは擦れ切った我が身の、あるいはやつかみなのも。

だが己は許せぬ。我が掟に背く生き方など、出来はせぬ。

しようとも思わぬ。だからこそ、俺は。

苔むす壁を睨め付けておれば、頭上より花のあしらわれた文がひとひら。

孤狼には、花の種は分からぬ。

だがこれはきつと菖蒲の花だ。

白昼夢の文と、落ち様一つ違わぬのだから。

月見櫓へ向かうべく立ち上がれば、己の腰にはとほとほと満ちた音を鳴らす瓢箪がある。

はて、己はこんなもの持っていたか思いを巡らすも、これと言って当たる節は。

あった。

あの白昼夢。お人好しの持っていた瓢箪に、酷似している。

よくよく考えれば、短からぬ間井戸底で、心身が異様に充溢している。

忍びの技も、十全に發揮できそうなほどに。

僅かに覗く曇天を仰ぐ。

貴様の饒別とでも言うつもりかよ、こんなところでもお人好しかよ、片割れ。

俺はお前の道は歩めぬぞ。

捨て難く、また分がち難く。

孤狼が古井戸を脱したのは、今しばし想い耽った後である。

月見櫓にて御子に見え、再び佩刀の楔丸を賜る。

御子は、主は、優しい。

命を賭して、仕えてもよいほどに。

だが孤狼の脳裏に、あの白昼夢がよぎる。

そして己の中の狼が囁くのだ。

此奴は貴様を謀ろうとしておったぞ、と。

荒れ寺で目を覚ますと隻腕の仏師が出迎えた。

葦名弦一郎。彼奴との斬り結びは身体のおかけか押せていたが、あろう事か横槍程度

で不覚を取るとは。

己の不甲斐なきを恥じ、左腕を見やる。

今度は、しくじりはせぬ。

「掟に従い、御子を捨てるのじゃな？」

「はい、掟は絶対に御座いますれば」

孤狼は掟を破らぬし裏切らぬ。だからこそ。

「私がかつて、修羅を見ました。あなたの中にも、同じ者がいる。私はそれを、斬らねばなりません」

こうなるのは必然でもある。

「もっと早く、斬っておけば良かったのか……」

激情が走った。脳髓が焼けたのかと錯覚するほど。

一度尽きた己の軀に、桜の花が舞う。舞い上がる。激情の焰に捲かれて。

「勝手に文を投げたのは、貴様であろうが」

立ち上がる。

「我が命を、弄したか。よくもほざいたな」



「なにが、修羅を斬る、だ。寝言は寝て言うがいい。何故、葦名弦一郎を、斬らなかつた」  
「それは…」

「どうせ怨嗟の鬼も、斬れぬ」

「ッ！」

怒りにまかせ疾風の如く飛び寄れば、女はこちらを投げ捨てようと柔の構えである。

二度同じ手は食わぬ。

襟首を捉えんとするその掌を忍び義手で掴み、指を絡めとる。まるで…まるで逢瀬を重ねる男女のように。

一瞬、ほんの一瞬だけ、女と視線が交差した、気がした。

にぎる義手に力が籠る。女の美しい指は抗えず折れ曲がり、骨が皮を破り、血が滲む。悲鳴が上がる。

掴んだ掌を放り出せば、女の脚が崩れ、地に手を付いた。

忍びがその隙を見逃すはずもなく、得物を横薙ぎに薙ぐ。

女が再び頭を上げるときには、もう太刀風を首元に感じており。

菖蒲の花が、落ちた。

「隻狼よ、お主」

「俺は狼だ」

音もなく現れた劍聖、葦名一心。

その声を遮って狼は続ける。

「義父を斬らねば、修羅と呼ぶ。修羅は其方らであろう」

「義孫は斬れぬが、義父は斬らせるか」

「黄泉返りなどせぬように、貴様のみすぼらしい首も叩き落して並べてくれるわ」

あの白昼夢が、孤狼に自信を持たせた。

老境の葦名一心、柔を容れ、研ぎ澄まされた劍技はしかし、劍聖の覇氣と威勢がない。

全盛を超えたという自負と、昂ぶる感情、そして習熟仕切った忍びの技が併さって、今狼の攻めは天守を覆いつつある焔よりも苛烈だった。

体術、義手、果ては葦名無心流、千変万化の攻め口が、一心をして受け一辺倒に押し込めていた。

一心の劍に曇りなどなく、常であれば柔能く剛を制す事も出来たろう。

しかし狼の攻めは単なる剛ではなく、柔をもまとめ流し攪う、まさに波濤であったのだ。

間違いない一心は気圧されていた。

「隻狼よ…ッ」

「くどい」

今際の言の葉をも遮つたのは、喉を貫く紅い刃だった。

「…待たせたのう。だが、こちらの首尾も上々じゃ」

「左様で御座いますか」

狼は、御子を捨てるに当たって決めていることがあった。

何故捨てるのか。掟に従うから。一の掟に従うから。

ならば他の掟にも、背くわけには行かぬだろう。

胸から突き出す刃。

梟の得物より短いそれは、しかしある日倅にそうしたように、自分の胸を貫いていた。

「義父上」

梟の膝が落ちる。己の同じ高さになった頭をつかみ、囁く。

「三年前は馳走になり申しした。

遅ればせながら、返礼いたす。倅の孝行、堪能されよ」

「なぜ、なぜ、今……」

「掟は絶対に御座いますれば。忍びの掟、ここに全て守り通し申しした」

みつつ、恐怖は絶対。そう嘯く孤狼に対し。

「餓え……た、おおか、み」

それは誤算の悔いか、己の倅への恐怖か。

もはや知る者は、誰一人としておらぬ。

「ああ……あああ……」

燃え盛る焰。並んだ首、三つ。

どれもが見知った顔で、ほんの一刻前までは言葉を交わしていたものばかり。

衝撃のあまり、啞のように呻くしかない御子を見遣り、

孤狼は告げる。

「俺は、これから好きに生きる。もう誰も、俺を弄ばぬように。」

「そなたも、好きに生きられよ。せめて城における内府方は、討ち果たしておくゆえ」

「ご健勝で。」

それが、九郎が狼を見た最後となった。

その夜、葦名の地に踏み入った内府方は、一人を残さず皆骸となった。

しかし結局は一心の死によつて、葦名の国は瓦解、内府が治めることとなる。

内府方は殺戮の下手人と一人のおのこを血眼になつて探すも、行方は杳として知れなかつたという。

ただ国境の峠には三つの小さな碑と鄙びた庵があり、立ち寄れば主が茶菓子を馳走してくれることもあるそう。